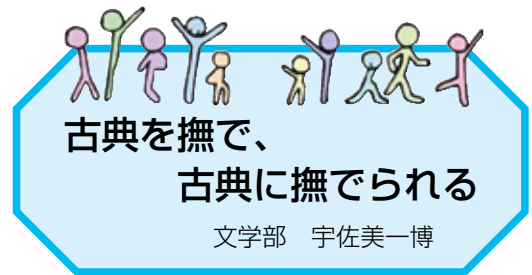




『母と子どものための 古来の美しい子どもの詩集』。  
愛らしい天使の絵など、美しい挿絵も充実している。

それにしても、なぜ彼らは子どもたちに古典を読ませようとしたのだろうか。判断力や現実感覚を養うだけであれば、古典でなく同時代の作品でも十分可能ではないかと疑問を感じる人もいるかもしれない。その主な理由は、古典や彼らが薦めた文学作品が、優れたリズムのような形式とともに、自分たちの共有したい内容をもっているからだ。古典の持つ世界を「教養」として、世代や階級を超えて共有することに意味があると考えていたのだ。

では、私たちが共有する必要のある教養とは何か。ここでドイツを離れ、日本で子どものために書かれた詩である童謡を例に挙げてみよう。「ぞうさん」や「お正月」、「シャボン玉」など、私たちの多くが知っている童謡は、明治、大正時代以来、歌いつがれ、今や古典となりつつあるとっていいだろう。これらの詩は簡潔ながら、私たちの普段の生活や心のありようを共有する世界をあらわしている。歌ってみると、私たちは誰もが感じる日常の喜びを共感したり、ふとしたときに見つけた美しいものを思い出したり、文化的行為をともに味わったりすることができる。教養とは、なにも立派で難しいことを知っていることだけではなく、このように「私たちの世界」として理解し共有できるものでもある。優れた童謡や古典文学は、そうした教養となる世界をもっている。子どもが読み口ずさむことによって、作品世界を過去の人々から受け継ぎ、また次の世代につないでいくことができる。だからこそ、新しい世代としての子どもが古典を読むことの意義があるのだろうと思う。



古典というと、東アジアでは、経学や歴史、諸子の書、さらには詩や散文など文学の書で、現在まで読み継がれている書物がそれに当る。古典を重んじるのは、唐の太宗が「古を以て鑑と為す」を三鑑の一つにしたように、古を鑑とする考え方と深く結びついている。

さて、「古典を撫でる」とはどのようなことなのか、と問われたときどう答えたらよいだろうか。古典を楽しむ者にとって、自分と古典との関係は、どのような関係なのか。故事成語に「尚友」という言葉があるので、これを手がかりに考えてみたい。

『徒然草』（第十三段）に、古典を読む楽しみについて次のように述べている。

ひとり、灯の下にて文をひろげ、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。

この後に、『文選』、『白氏文集』、『老子』、『莊子』、日本の博士が書いたもの、それが古典として挙げられている。吉田兼好のこの文章は、『枕草子』（二百十一段）に触発されたものであるが、いずれも中国の『孟子』（万章下）の「尚友」を踏まえている。「尚」は上の意で、古にさかのぼって古人を友とするという意味である。孟子は弟子の万章を論して次のように言っている。

一郷の善士は斯ち一郷の善士を友とし、一國の善士は斯ち一國の善士を友とし、天下の善士は斯ち天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと為し、又尚りて古の人を論ず。その詩を頌し、その書を読むも、その人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ずるなり。是れ尚友なり。

古人の作った詩を吟じ、その著書を読んだだけではその人物のことはよくわからない。さらに遡って行ってその古人の活動した時代をよく知り、古人と一体になってその時代を生きてみ

る必要がある。そうして始めて古人の人となり、詩や書の意味が理解できるという。

重要なのはこの後である。古代に留まったままでも、現実から逃避して一時的に自分の心が癒やされることはあるであろう。しかし、古人に友として認めてもらうには、また自分が生きている現代まで戻ってきて、古人今ありせばどのようにするであろうかと考えなければならない。古典の中に自分を見て、自分の中に古典を見る。現代の世界に身を置きつつ古典的なものを取り込み、古典の世界に分け入りながら、現代へとつながる線を見つける。過去をただ懐かしむのでもなく、新しい時代を否定するのでもなく、時代のはざまで自分の立ち位置を見つけ、そこから現在と未来を逆照射してみる。『論語』の有名な「温故知新」(為政)である。渋沢栄一もこの条の解説の中で、伝統的な考え方と欧米の新しい考え方の両方とも生かすような形でどうバランスをとるかが今日的課題であると述べている(『論語講義』)。東洋哲学的な概念で言えば、「中庸」の追求と言ってよい。新井白石もこのことをとくに強調した。白石は、「天下有用の学」に心を惹かれ、徳川家宣に奉った「進呈の条」の中で、「いにしへを知るといへども、今を知らざれば所謂春秋の学にあらず」と力説している。江戸幕府の教育の中心、昌平黉の教授であった佐藤一斎も、「分を知り足るを知るは、過去を忘れざるに在り」(『言志晩録』)と言ひ、古典を通して過去を知る重要性を喚起した。そして読書も心学だとし、冷静、沈着、入念、謙虚な態度で読むべきだと言ひ、孟子の「尚友」に対して次のように説いている。

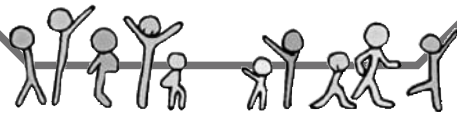
孟子、読書を以て尚友と為す。故に経籍を読むは、即ち是れ嚴師父兄の訓を聴くなり。史子を読むも、亦即ち明君賢相、英雄豪傑と相周旋(応接の意)するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對へざるべけんや。(『言志後録』)

一斎の解釈には、中国における経学成立以降の考え方、及び江戸時代の幕藩体制の影響が色濃く窺われ、教師と生徒、父と子、君と臣など、縦の関係が強く打ち出されている。しかし縦の関係では古典を撫でることは困難である。孟子の場合は、善士と善士の関係、いわば横の関係

であった。友人との関係については、孔子も、「子曰く、己に如かざる者を友とするなかれ」(学而)のように、重要なテーマとして取り上げ、その関係について、「朋友と交わりて信ならずや」(学而)のように、お互いの信頼関係が基礎にあるとする。「尚友」は、基本的には横の関係であり、気が置けない、信頼に裏打ちされた関係である。これなら古典を撫でることができる。古典を撫でて学ぶ中で現代に通じる水脈を探り出し、現代において自分の立ち位置を考える。いい立ち位置を見つけ、きっと古典も褒めてくれるだろうと思えたとき、私は古典に撫でられた気分になる。私が古典を撫でたり、古典が私を撫でたりするのは、お互い敬意を表しつつ信頼に裏打ちされた友人関係があるからである。

## 漢詩を「撫でて」 みませんか？

文学部 三野 豊浩



中国の古典文学が専門なので、一筆書かせていただくことにした。

古典を「撫でる」というのは、実に面白い表現だと思う。今では死語かも知れないが、『詩経』に由来する「切磋琢磨」という四字熟語がある。玉や石を刃物で切り、やすりでこすり、槌で打ち、砥石で磨くように、日々努力精進することをさす。少なくとも、かつては定番の四字熟語だった(ように思う)。そのように、私の感覚からすると、漢詩や漢文というものは決して「撫でる」ものではなく、一文字一文字、ノミか何かで彫ったり、削ったり、刻んだり、あるいは挟ったりしながら読み解くものである。ある程度の専門家にとっても、漢字の手ざわりは決して仮名文字のように柔らかいものではなく、基本的に固くごつごつしたものである。そんな漢字ばかりで書かれた文献を読み解くことは、ある意味で大きな石のかたまりを相手に悪戦苦闘しているにも等しい。しかしそれだけに、古典を「撫でる」という表現に興味をひかれた次第